

東家・飯島



11,400

南家・加藤



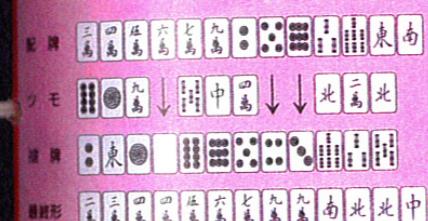
31,500  
△1,000  
30,500

西家・荒



39,200  
+1,000  
40,200

北家・綾辻



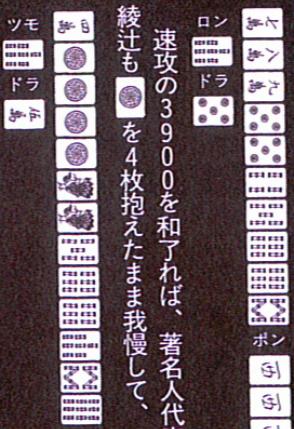
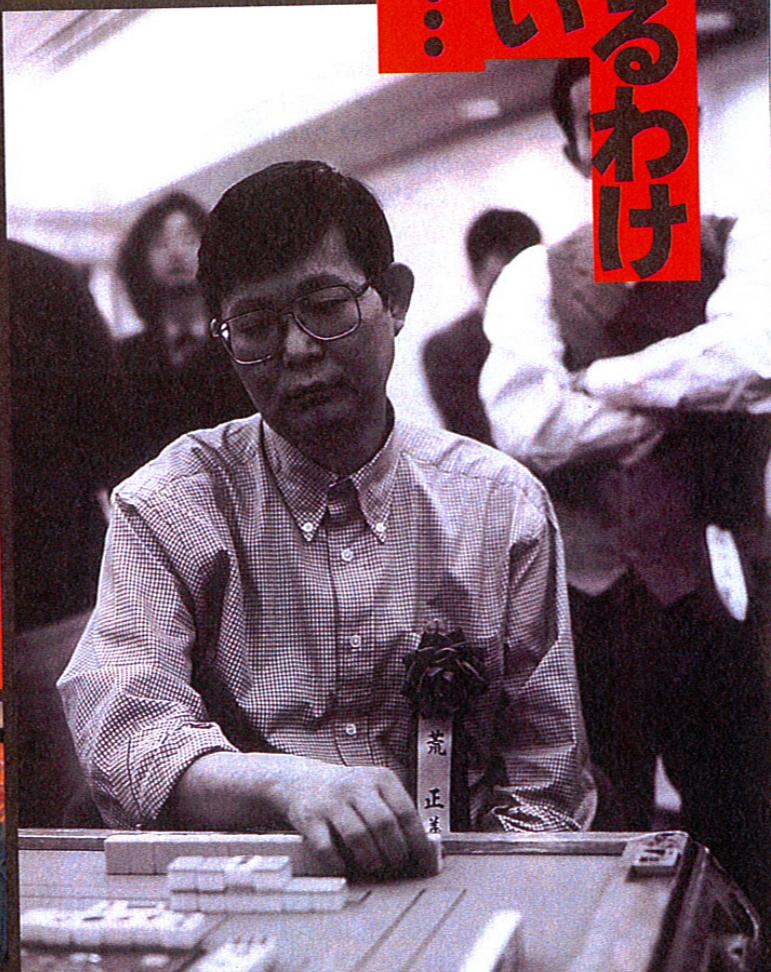
17,900



—抱った重責から解放されホッとする瞬間。

馬場プロ熱視線 /

プロが負けるわけにはいかない大会だつた……



速攻の3900を和アれば、著名人代表の綾辻も四枚抱えたまま我慢して、

7巡目に四を引いて好形のイーシャンテンになつたところで、おもむろにアンカン。何とカンドラが四になり、リンシャンから四を引いて四切り即リーチ。あっさり四をツモりあげて満貫と、文壇ナンバー1の片鱗を披露する。

しかし荒に迫つたのは、やはり同じプロの加藤であつた。南2局、3局と連続で和了りを決め、荒との点差を7700にまで詰め寄つたオーラス（全体牌譜参照）。悪配牌にもかかわらず見事高目満貫の手に仕上げるのだが、荒の必死の食い仕掛けの前に敗れ去つた。

それでも見れば見るほど麻雀の一打一打の重さを感じさせる牌譜である。加藤が7巡目に四ではなく三を切つていたら……。

貴兄は優勝おめでとう。

貴兄は決勝戦が始まる前、優勝への意気込みを聞かれてこうコメントしていましたね。

荒、「どうせ4分の1の闘いだからさ……」しかしそれは貴兄の照れ隠しでした。

なぜなら貴兄は優勝を決めた直後、上気した顔で私に次のように発言したのです。

荒、「良かつた……プロが負けるわけにはいかない大会だと言われていたから……けっこうブレッシャーがあつたんだ……」

御自分の優勝よりもプロの面目を保てたことを心から喜ぶ貴兄は、「まさか」「優勝位」の